



13
1145



青樓
鉛卷之味錄

13
1145



月々々

止江舟幸
九月廿七日
日

けり九廿海のぐえん一物候らゆぐえ

けゆる独々一に打と衣形思ひをのぞ

ひりよと変ししやどに照るる砂の浦

るる結ぶもほちのめ核舟のまがてあるる

とと変ししほふ任仕るるて候あせり

流女ながれめと申のむらび飛かあぐらうめうらなら
とらぬのよりにあやしくあやしくおと切きり
侍とこのいひやうもびやひく
産うまのやちまもうもう紙かみ百ひゃく古こ乃
たんつつのいひやうもびび侍じののまら
これハと依よ日ひ紀きちんちんののまらまら まら

一

をすもさおたお礼れ本ほんととのの所
めらめららもも一一とと見みんんととてておおままつつははし
とらとららひひががははららとと侍じののま

富とみうう家け乃の終はふふすすも

流女ながれめと申

とらぬのよりにあやしくおと切り

福清圖



子供屋



伊勢物語或曰勢女之筆作或云其筆
之月記未能決焉云云此草紙ハ妓女の筆
なる事明し其故ハ妓女と云ふ名を想像
する情を端ニ感深し他のた乳本ハ多
妓女之情と推量する況や孫一のふん
得之及古中將之可書聊為奥書系

右 無名子技覧

部屋三味線

○附見大意

近來清人著す所の艶史多々渡り妓戸
娼門中固み蕃術一變弱及を悉く其
書を閱み異城も本朝も人の情といふのハ
少くも變るる度ハなまされども蕪くも
乃感ハ何れも明乃世よハ少里ハ金陵
いふ公の花街何れそ廓妓の凡俗衣冠

志と我 東方今の世の原のどく又今度
はてして一箇の外場也りの是は風俗俗人同
かして浮花川の妓思おゆるりさればすーと
浮花川の風俗大お同どくは藝又し
うづはしきやまも人情のうとてかへく園も
らんぬもむくも今も後とてうろへ房さすれ
そ 是るの事ねーはまどまも人おとびの權が
ちがよいらぶさうらりすーとてあう

浮花川あらののりそびと今もびまづ初舎うら
まづとてうろもく見通一せはーおどろのうら
あどろのの事かん海とんてーいもどとんは
をひひのひひひひひひひひひひひひひひひ
とすあ律政のまろくははまゆひーいりせ健
とまもよ今納と志中うほーとらひひと
何ら者よ性合千金乃持と敷とぬきひ乃
也まもー白ん者さ寸細乃間とぬす

南條一行乃一切らそびよまきま十総のま令
との地一故國の心くく申く康入早
らかいつたみ肩たつて裁羽を湯でくきあつて
湯くははきごと内なるをそくふりたなご
娘まことな中へまははれ今からいかに
ぞははらむかへりてはなは川よまよひあはれ
やこゝ一糸の野の由はまのこころよはれ
うゝあはれあはれよはれあはれくくはらわたり

かりけせるなまの心か買のりてははれ
かゝるはな流遊の風流うゝくはれはあま
の流ははり難乃あまのこころをそくふり
うゝくはれははれははれははれははれははれ
もまゝく秋月の言今もははれははれははれ
星ぞはなは川は遊びははれははれははれははれ
究庵をうゝくははれははれははれははれははれ
くらりてははれははれははれははれははれははれ

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines. Several words are written in larger, more decorative characters, possibly indicating specific terms or names. The script is dense and fills most of the page area.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines. The script is dense and fills most of the page area. There are some larger, more prominent characters interspersed within the lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines across the page. Several characters are enclosed in rectangular boxes, possibly indicating specific characters or words of interest. The script is dense and fluid, characteristic of historical shorthand systems.

Handwritten text on the right page, continuing the cursive script from the left page. It features several boxed characters and maintains the same dense, fluid style. The text appears to be a continuation of a single piece of writing.

Handwritten text on the left page, continuing the cursive script. The script is consistent with the right page, showing a high degree of fluidity and density. Boxed characters are also present here, marking specific points in the text.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines. The script is dense and fluid, with some characters appearing to be ligatures or specific dialectal forms. The text is contained within a rectangular border.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines. The script is dense and fluid, with some characters appearing to be ligatures or specific dialectal forms. The text is contained within a rectangular border.

母を病しくしむるはかゝるに女に在りて
かせんといふ事か 此は人の道に死をせんせ
る事あり母の身あり死んでん世もいよさら
へんといふ事か 文句を修へ **おね** 三
ありおそれけいよきしんのおうな
男は母を愛しむに **おね** 三
とんといふ事か ありは気がとめかうにけり
あり是れあり行そらの修へ男がとん乃

おね 三 此は人の道に死をせんせ
る事あり母の身あり死んでん世もいよさら
へんといふ事か 文句を修へ **おね** 三
ありおそれけいよきしんのおうな
男は母を愛しむに **おね** 三
とんといふ事か ありは気がとめかうにけり
あり是れあり行そらの修へ男がとん乃

ふむほく かた一のびらひいふやわらばかかとい後
のいし権しとまゑのあさめて初念のあひくもら
し男とちのいしをうらなふよやれやすが
まらあぐくもいふてはらちかろ一たつらうで
あひ推かちあがあぐ男づくても然うたくても金
しやいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
そのいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

あつまきでいふいふいふいふいふいふいふいふ
がけいひのいふいふいふいふいふいふいふいふ
あて二親かのいけんでいふいふいふいふいふいふ
あつて海あのいけんでいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

くるまの福(こゝろ)とていふらんともあへともがあれとあ乃
とどめりうとてあしとらとていふらん福(なま)の
りよまもあ福(なま)の八備(よん)さん(の)祭(まつり)の物(もの)
の事(こと)よがとるへくよひとていふらん福(なま)
いへたがト(た)あつておとらうとていふらん
らてあへてあ福(なま)のいん(いん)とていふらん福(なま)の各(各自)
づいて初(はつ)會(かい)のい(い)が(が)あつてい(い)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)
を(を)あ(あ)つ(つ)て(て)い(い)ふ(ふ)らん(らん)を(を)

は(は)い(い)と(と)い(い)ふ(ふ)らん(らん)は(は)た(た)が(が)備(び)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)
わ(わ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)
も(も)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)
思(おも)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)
の(の)備(び)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)
そ(そ)の(の)備(び)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)
よ(よ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)
と(と)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)あ(あ)ひ(ひ)

うそぞろつてはくつておいてらんあしたの
んでいぶいぶかひをむづりふをそく出さ
そふうとあひと一層のかあふ外りでもあ
事どきつこまづくしんそくゆふふんら
らつてくはるるまはひのむあぶの女房おんなむらや
とるこのやうでかうしきやう後うう又二層の
多しゆりあーあておのの肉せうの端はしでい
やうあつてのいふいふやめあぐでたてつ

中よりかーとあつてをうつて二層のめは
その中でいふんかやう引強つて折のころ
晩あつてもうさう強あつてとてかたつて
あその初もはあてかおてあぬらりあーお
名代せとつてつひをいふ事でさう強やうあ
とらつていふいふあつてよお初めの肉六さんハ
とらつていふいふあつていふあつたがあ
いふあつていふあつていふあつていふあ

ちいさな海がなままじうまきげんめいぞんか
ともいんぢりーろいせうでぬさいとおまらま
あせうあふうんてわんげらあふあつてけさ
でもちんとあまのいよびふかりあつてあがかり
くののさんあんたうりでもあゝ息をつきあを
つき合して南じくちてあをわうーやあま
どうらゝのあめのの袖の内の海はあま
あまあまあまあまわうんが今でもあまあま

あまあまあまあまのあまあまのあまあまの
色のあまのいあまのあまのあまのあまの
とあまあまあまあまのあまあまあまあま
かゝあまあまあまのあまあまあまあま
あまあまあまあまのあまあまあまあま
があまあまあまあまのあまあまあまあま
があまあまあまあまのあまあまあまあま
があまあまあまあまのあまあまあまあま
あまあまあまあまのあまあまあまあま

そのまじらうしんが船^{せん}にたすきあんな
とを折るのつるもくろく中であて
おこやとえやとまふまふむいふらんが
碎^{くだ}てまきぞうまふとちんぐとらんが
たもつ^つまふたあつたあつたあつたあつた
くくくまふがくくくくくくくくくく
のもしんがくくくくくくくくくく
かむ竹^{たけ}の中病^{びやう}で板^{いた}はひらくくく

梶^{かぢ}のまじらうもあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
のもしんがくくくくくくくくくく
かむ竹^{たけ}の中病^{びやう}で板^{いた}はひらくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
あつたあつたあつたあつたあつた
くくくくくくくくくくくくくくく
あつたあつたあつたあつたあつた
くくくくくくくくくくくくくくく

のしつ瀧のてりあがりて嬉しめい(55)の
きてあつ福くらりるや女を元もろらるに
土地を借せりて倉番よりあつ知
福入るてしつ瀧の福くらるもろらる福
のしつ瀧のてりあがりてあつ知(56)の
あつ知(57)のてりあがりてあつ知(58)の
もろらるに(59)のてりあがりてあつ知(60)の
懺悔(61)のてりあがりてあつ知(62)の

らあつ知(63)のてりあがりてあつ知(64)の
あつ知(65)のてりあがりてあつ知(66)の
あつ知(67)のてりあがりてあつ知(68)の
あつ知(69)のてりあがりてあつ知(70)の
あつ知(71)のてりあがりてあつ知(72)の
あつ知(73)のてりあがりてあつ知(74)の
あつ知(75)のてりあがりてあつ知(76)の
あつ知(77)のてりあがりてあつ知(78)の
あつ知(79)のてりあがりてあつ知(80)の
あつ知(81)のてりあがりてあつ知(82)の
あつ知(83)のてりあがりてあつ知(84)の
あつ知(85)のてりあがりてあつ知(86)の
あつ知(87)のてりあがりてあつ知(88)の
あつ知(89)のてりあがりてあつ知(90)の

け若きよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの

のぞい客元はきこへりていりていりていりていりて
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの
けよきなるものなりけりた福^{ハナト}なるもの

お松

折がらうへ外の茶屋おいておる時中へ
分や女がまゝさびおかおてハねでも
うらまゝおれいさうさびお借して
りのおで借してさうしお借して
鬘かひさしおのまきさうさうさうさ
ゆのまゝおていさうおていさうさ
板とさうさうさうさうさうさ
ふささささささささささささ

かひつてさうさのでおの後のたさ
あくあつ目をするのさうささ
とさうさうさうさうさうさ
の中さうさうさうさうさ
さうさうさうさうさうさ
といさうさうさうさうさ
さうさうさうさうさうさ
おさうさうさうさうさ

中へ申しておゝあまのまじりしつて
かゝておがひつていもろ海河のあゑも折の
ころいぞもぬくつらむ理しきつちがう後が
たのい^{たの}とまゐいあいなふサくらちのお
あつち中へゆつても向ふの茶屋(つらうつ
くあつてはる龍口のあつちを後とらて
向ふのあつちまはらふありのし後とあて
くしてまゐりつちかたへむらあひ

先人の茶屋(能てゆ)河原のまはらうな
はあつち目せらる後(も)まのあま
とんつらふのびがあつちつらむいふ
アつちあまのびまゝあつちあつちあつちま
小あつちつらうつらう押うけてあつちのあつち
ひつてあつちあつちあつちあつちあつちあつち
十人のあつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

てアノ女痴をのり年々く變ぢるの杖を
シノ様子おわづらひおぼへて
自然に思ひこゝろの世は
じやうとておぼへて
流るるもくまらざるを
あらたに思ひこゝろの世は
めづるに抱ひて
しるはしむるに
しるはしむるに

よるを流るるに
なりとも外の
時一層とらん
好のころの
てしるはしむるに
を流るるもく
室といふ高内と

が腰をこびりこいておぼへたるも内にて牙
多ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
たつゆもさうぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
者よぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
[お]かみ抱の肉にておぼへたるも内にて
りのでらぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
にさの初會ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ておぼへたるも内にておぼへたるも内にて
なとでもいふぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
いかしづぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
はまういよぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
るもあつぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
きつぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
出とら遊びのたてが遠し抱して自前ぢぢぢぢぢ
おぼへたるも内にておぼへたるも内にてお抱

ておぼへたるも内にておぼへたるも内にて
なとでもいふぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
いかしづぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
はまういよぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
るもあつぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
きつぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
出とら遊びのたてが遠し抱して自前
おぼへたるも内にておぼへたるも内にてお抱

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

の内いふが多くはあふも能くあつていふとて
たふ然りしてのらつて娘分や女元ふたしき
うらましくい月のは翁も幾目とれを流つあ
る園と流る遠殿をくらぬくて播の流を
いころせくアアをたのまのわさむてしせ
たでもいふ地を名をせくあふめこのモシ
かの尻の身やるとく一由元のちる種く女元
あひけりくあがりぐ種くを野のいふ家のりた

るもい抱りの自家の子ふたつ念いああもた
うぐおまを抱りかりるあがわつあま
おたがうくても至ら種内にああの一入つて入志
くあひいといふとてあふるあうといふあが
のサもいといふもあ家のよたふなるあといふ
とだつあサ**おま**ああとの袴のせといふあつ
もあ家のあいあふだあふあといふああが
あ家つりあ家のあといふあがとんだあが

の湯つらひふくせむの危の寝てゐる麻（おき）紀（おき）着（おき）を
あつ着の危（おき）がきえくぞく半があらぬのこころはら
と交（おき）配（おき）どかかしてきつれ福（おき）母の男（おき）人を
道へあつてくちつてうゝ海（おき）やのら半（おき）が
あつたはせは物（おき）あつてふをふ（おき）モ（おき）た（おき）交（おき）
せむる娘（おき）をや女（おき）危（おき）のち家（おき）のち人（おき）危（おき）がせいでこや
ゆせつちせむの危（おき）あつたのち人（おき）のちわら（おき）福（おき）（おね）
おねの百人（おき）危（おき）といふはせむるせむるしててとよまや

危（おき）あつたといふはせむるせむるのち人（おき）のちわら（おき）福（おき）（おね）
遊（おき）びも大（おき）風（おき）あつて人（おき）のち人（おき）のちわら（おき）福（おき）（おね）
たつたはせむるせむるのち人（おき）のちわら（おき）福（おき）（おね）
ほうふ解（おき）まて麻（おき）で寝てきまう（おき）あつた女（おき）危（おき）の
身（おき）をふくちつてきまう（おき）わら（おき）のち人（おき）のちわら（おき）福（おき）（おね）
ふちつたはせむるせむるのち人（おき）のちわら（おき）福（おき）（おね）
おねのち人（おき）のちわら（おき）福（おき）（おね）
あつたはせむるせむるのち人（おき）のちわら（おき）福（おき）（おね）
あつたはせむるせむるのち人（おき）のちわら（おき）福（おき）（おね）

よいかたしてきまも人のく無劫定め落着者
いふの言しむらば一むさうさひの処世帯
持ゆる事ぞ一たあは元あざふあるのぞ
其うらつらめくわのすいふ遊びのたぞ
目白のいふいぢ者あぢ操の糸をたす
あつらひのくはは梅の枝も酒でも宿
つらさくぢ者すもくはの替り物茶屋は
くせうらつらめくわもあぢ異りぬ人者

の二本入のき屋つきの扇定人落着者
あつらひのくはは梅の枝も酒でも宿
つらさくぢ者すもくはの替り物茶屋は
くせうらつらめくわもあぢ異りぬ人者
むさうさひのすいふ遊びのたぞ
目白のいふいぢ者あぢ操の糸をたす
あつらひのくはは梅の枝も酒でも宿
つらさくぢ者すもくはの替り物茶屋は
くせうらつらめくわもあぢ異りぬ人者

あつたにせよのりしをきりてしるぬかしの
くし受て家が垣かたしをきりてしるぬかしの
こころぬかしかうしるぬかしのきりてしるぬかしの
むならぬ場よなるしをきりてしるぬかしの
合ふとて擗ぶとてしるぬかしの
はしりてしるぬかしのきりてしるぬかしの
がまじりてしるぬかしのきりてしるぬかしの
かたそのもきりてしるぬかしのきりてしるぬかしの

その家の入り見通ふ大わがしるぬかしの
あつたにせよのりしをきりてしるぬかしの
はしりてしるぬかしのきりてしるぬかしの
はしりてしるぬかしのきりてしるぬかしの
あつたにせよのりしをきりてしるぬかしの
こころぬかしかうしるぬかしのきりてしるぬかしの
むならぬ場よなるしをきりてしるぬかしの
合ふとて擗ぶとてしるぬかしの
はしりてしるぬかしのきりてしるぬかしの
がまじりてしるぬかしのきりてしるぬかしの
かたそのもきりてしるぬかしのきりてしるぬかしの

あはれびいひいひの若衆の情を知く
わんかやいづらやあまの床のつらさの
床ふとねいでおるは可てまの床おがふ
飛つて女の通者でございませう
お若らやいづらやあまの床のつらさの
神のぞいづらやあまの床のつらさの
遊よいづらやあまの床のつらさの
のまらやいづらやあまの床のつらさの

あはれびいひいひの若衆の情を知く
わんかやいづらやあまの床のつらさの
床ふとねいでおるは可てまの床おがふ
飛つて女の通者でございませう
お若らやいづらやあまの床のつらさの
神のぞいづらやあまの床のつらさの
遊よいづらやあまの床のつらさの
のまらやいづらやあまの床のつらさの

身のついでにこの世のようもいへ何れ
若かりし時つきとてしるしんんてくれ
あつた見むく友を中も思ひてさかぬまふ
かりし遊びもあつたよめのであつたまふ
舟もぎのついでとらまうけんかのサ茶屋
子もあつたなつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

遊ひの令とついでにの世をよめるものゆへ中
小舟とついでにの久しなくあつたあつたあ
あつたの外もあつたあつたあつたあつた
たふあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

やまのめ(ガモ)康をどよふれがらふらふら
福お松ソコ中も流ハ二小敷ニ小座ニおま
やま敷のいのちの子れはれ付て是あま
えぬもうまの座てお家をころはあふ
めがわりおは母のわるさ一てのおつ子の押世
てあまをころはあまのサ今で六座よりをあて
えそりやせん其こころい橋和所わたりで初會に
帯おひ流らふまなり申したもを流乃ま

おまわの子まきかやうものガあせらあまがつ後
といふまあぞつねお松それの合とれ目をお
いてお家の敷をころは癒をのきんとわろ子サい
そんとするまうい志福とあえまうて情いの
いまふ思ふのサ統うたの目とあの成けて各まの
おろしお身う業く流とらかくと合河あかか
自おつてわいのほまきあのびらうあえとる
座でまら福あがいのサつ痛い骨くあまわ

おまの 姪^{まひら} 二日^{ふたひ} くらゐ^{くらゐ} だ^だ 一^い ち^ち 又^{また} 温^{ぬる} 湯^ゆ を
湯^ゆ や^や ぞ^ぞ 一^い の^の 念^{ねん} を^を 出^だ せ^せ ば^ば だ^だ 一^い ち^ち 又^{また} 温^{ぬる} 湯^ゆ を
と^と 一^い の^の 角^{かく} へ^へ 神^{かみ} 懸^か せ^せ ば^ば だ^だ 一^い ち^ち 又^{また} 温^{ぬる} 湯^ゆ を
た^た 一^い の^の 水^{みづ} ぎ^ぎ せ^せ ば^ば だ^だ 一^い ち^ち 又^{また} 温^{ぬる} 湯^ゆ を
神^{かみ} 座^ざ の^の 上^{うへ} へ^へ 一^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を
ら^ら 一^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を
び^び の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を
い^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を

おまの 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を
た^た 一^い の^の 水^{みづ} ぎ^ぎ せ^せ ば^ば だ^だ 一^い ち^ち 又^{また} 温^{ぬる} 湯^ゆ を
と^と 一^い の^の 角^{かく} へ^へ 神^{かみ} 懸^か せ^せ ば^ば だ^だ 一^い ち^ち 又^{また} 温^{ぬる} 湯^ゆ を
た^た 一^い の^の 水^{みづ} ぎ^ぎ せ^せ ば^ば だ^だ 一^い ち^ち 又^{また} 温^{ぬる} 湯^ゆ を
神^{かみ} 座^ざ の^の 上^{うへ} へ^へ 一^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を
ら^ら 一^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を
び^び の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を
い^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を 一^い の^の 湯^ゆ を^を

もいふ事いふ事福のめりかき長くても出来ぬ
いふのがあつたらまじひのまじひの福お松に
福の中もいふげうのまじひをいふておる人
何うなるかゆうの事のおる人かかへて遊
こあつて人かかへてまじひの事あつたのこお松
かかへていふおる人かかへて女房持のまじひの福
客の徳のあつた福をたかへていふか
金と紙とをいふまじひの事あつたのこお松

紙の中何背をいひて後ておるまじひの事
まじひの事あつたのこお松とよの福
うらむいふおる人かかへてまじひの事あつたのこ
かかへていふおる人かかへて女房持のまじひの福
何うなるかゆうの事のおる人かかへて遊
こあつて人かかへてまじひの事あつたのこお松
かかへていふおる人かかへて女房持のまじひの福
客の徳のあつた福をたかへていふか
金と紙とをいふまじひの事あつたのこお松

元八床隙のあつた福のサお松の事あつたのこお松

ころまは妙といふまきとては海おれいりてつえふ
よものあざの危あざなまをじてか家の望わめて
ころてもいふ事うあいなとのあがく中なかのまを
枕の中うろあまをよごす心をあまのつれあは
のつれの中あまをおまころりてとまきへしは海
[ア、イ、カ、ホ、ニ、ノ、ハ、ヘ、コ、ク、ケ、コ、ク、ケ、コ、ク、ケ]
やぐよあまの福ボク高タカ人ヒト拾ひろやとぬぐり
冊畢

○附言

夫夫黴瘡カサカサ下疳カサカサ便毒カサカサ結毒カサカサ之病カサカサ近世カサカサ尤カサカサ
盛盛而而貴貴賤賤男男女女羅羅之之者者十居十居其其半半是是
和和華華一一轍轍蓋蓋承承平平酣酣歌歌之之都都會會人人
樂樂安安佚佚內内則則膏膏梁梁膩膩味味常常充充口口腹腹遂遂
生生濕濕熱熱瘰瘰血血外外則則沈沈匿匿柳柳巷巷花花街街以以
動動蕩蕩淫淫火火一一釀釀成成此此病病遂遂傳傳之之娼娼妓妓
男男娼娼則則娼娼妓妓男男娼娼之之傳傳諸諸人人也也不不知知

其幾千百ナラフ或傳之ハル妻妾メカ或遺之ス孫甥
而終身為癩癩之疾豈可不恐謹哉
予非醫家是雖非所關姑記為世之
鑒戒噫房勞野合者深戒之戒之

一名曰
杯燈太

遊ユウ僊セン窟ク烟エン之花ノハナ

全一冊 同出版

揚花
水性

浮ウカ華カ川ガハ容ク氣キ

全一冊 同出版

